



H a f a A d a i

令和2年11月2日
グアム日本人学校
学校たより
第4号

「鳥のように」

校長 工藤雅敏

もう、何年も前のことです。ここは、全米ジュニアオリンピックの競技会場、棒高跳びの決勝です。ポールの高さが、5 m 3 0 c mにセットされました。

マイケル・ストーンの手には汗がにじみます。彼の自己ベストより9 c mも高いのです。競技をしているのは、もはや、彼一人。スタンドでは、2万人もの観衆が彼を見守っています。

小さい頃から、彼はずっと、空を飛ぶことを夢見てきました。田舎道を走り、ぱっと地面を飛び立つ。そうすると、鷲のように大空を飛び回ることができるのです。その夢を実現するために、彼は、棒高跳びにチャレンジしたのです。

1回目、失敗です。2回目、またもや失敗です。そして、最後のジャンプ。

自分のバーを見つけ、助走路に出ます。会場全体の張りつめた雰囲気は彼を包みます。体全体をまわして緊張をほぐそうとしましたが、かえって体が堅くなってしまいました。

不安でいっぱいになった時、心の中に母親の顔が浮かびました。「なぜ、こんな時に母親が出てくるのだろうか?」「そうだ。緊張したり、不安になった時は、深呼吸をしろ」と、小さい時に母親が教えてくれたんだ。

彼は深呼吸をしました。2回、3回、4回。慎重にバーを持ちました。胸がドキドキします。会場はシーンとしています。すると、どこかで、小鳥の音がしました。

「今だ」助走路を走りだした時、何かが今までと違っています。とても懐かしい感じがします。バン!! バーをボックスにさします。大空へ、ジャンプ。

マイケルの体が、ゆっくりと空を舞いました。そのまま着地。一瞬の間をおいて、固唾をのんでいた会場から、割れるような大歓声が巻き起こりました。

仰向けになったまま、彼は、母親の笑顔の思い浮かべました。父親も笑っているだろうか。いつもクスクス笑う父親だからな。マットの上で、彼はニヤッと笑いました。

しかし、マイケルは知らなかったのです。その時、父親は妻を抱きしめて泣いていたのです。周囲を憚ることなく、息子の快挙を目の前にして、大声で泣きじゃくっていたのです。

その日のマイケルの記録、5 m 3 0 c mは、国際ジュニアオリンピックの世界新記録でした。全米のマスコミヤスポーツ業界が彼に注目し、その快挙を祝福しました。しかし、それは、彼が世界新記録を出したからだけではありません。

なぜならば、彼、マイケル・ストーンは、目が見えなかったからなのです。

※ 苦しいときだからこそ、希望を持って頑張っていきたいと思います。